

## 儒学テキストの素読とその意義

世界の宗教伝統のなかでも、ヒンドゥー教やイスラームなどの伝統的な「学校」では、聖典の言葉が長年にわたって、記憶によって世代を超えて伝承されてきた。その学びの場としての「学校」は、聖典の内容を深く理解するうえで重要な役割を担ってきた。そうした伝統的な宗教教育の場は、わが国の江戸時代における「寺子屋」のような教育組織であった。わが国では江戸時代、都市であれ村であれ、人びとの多くは「寺子屋」で文字の読み書きを学んだ。近世の学問は、儒学が基礎にあった。蘭学のテキストも、その多くが漢文であった。そのために、学問を志す人は何らかのかたちで儒学を学んだ。ここでは、江戸時代の伝統的な教育について、「語られる聖典」という聖典論の地平から、儒学テキストに焦点を当てることによって、儒学の古典テキストを素読することの意義を考察したい。学びの場としての「手習塾」(寺子屋)

一般になじみ深い「寺子屋」という言葉は、意外にも、江戸時代には広く用いられていたわけではなく、必ずしも統一された呼称はなかった。「寺子屋」の呼称は上方(関西)で用いられていた。上方には歴史の古い寺院が多くあり、中世には寺院が庶民への教育の場であった。「寺子屋」は一般には「手習塾」と呼ばれていた。「手習塾」とは、文字通り、子どもに手習いを教えるための塾を意味していた。明治に入って近代学校が普及する以前、わが国では、学びの場として手習塾や藩校があった。江戸時代の後期、全国的に都市でも村でも、すぐ近くに子どもが毎日歩いて通える手習塾があった。<sup>(1)</sup>

子どもたちはふつう7、8歳で手習師匠に入門した。入門には特に定まった時期はなかった。ただ習慣として、2月の初午の日に弟子入りすることが多かった。入塾はあくまでも塾の手習師匠の弟子になることを意味するもので、手習塾という教育組織に入学するという意味あいではなかった。そこでの学習は、子どもたちが手本にしたがって自ら手習い稽古するという具合に、自学自習が原則であった。<sup>(2)</sup>

### 儒学テキストの素読

すでに述べたように、江戸時代には、ただ単に「学問」と言えば儒学を意味していた。儒学は四書五経などのテキストを読むことに徹した学問であり、学ぶべき学問の最も正統的な位置におかれていた。それはあらゆる学問が立脚する基礎教養であった。子どもたちは「私塾」と呼ばれる学問塾において、四書五経によって代表される「<sup>けいしょ</sup>経書」という古典テキストを学んだ。四書五経とは、『大学』『中庸』『論語』『孟子』(併せて四書)および『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』(併せて五経)のことである。学問塾は師と弟子がともに学問するための、学問の場であった。経書という儒学テキストは漢文で書かれており、10歳ごろまでに儒学テキストの素読を終えることが求められた。

「素読」とは、たとえ儒学テキストの内容が理解できなくとも、声を出して繰り返し読み、そのままに暗誦することを意味した。たとえば、江戸時代の有名な儒者、貝原益軒(1630～1714)は子どもの教育を体系的に論じた著書『和俗童子訓』の中で、「本を読み、学問をする法は、年が若くて記憶の強い時、四書五経をつねに熟読し、回数を何べんも重ねて暗記し、音読するがよい。」また「四書を毎日百字ずつ百べん音読して、それで読んで、それで書くがよい。」(原漢文)と記している。<sup>(3)</sup>このように儒学テキストは、声を出して繰り返し正確に読み、心に憶え込むことが肝心で

あった。貝原益軒は子どもの教育に関する体系的な著書『和俗童子訓』をわが国で初めて出版したことから、わが国の「教育学の祖」とまで言われる。その著書の初版は宝永7年(1710)であったが、それ以後も版を重ねて読み継がれた。このことは当時も、人びとが子どもの教育に強い関心を抱いていたことを示唆している。<sup>(4)</sup>

江戸時代の教育は、原則的に個別指導であった。素読も本来、個別指導であった。子どもの前には、大判の木版刷りのテキストが置かれ、師匠はそのテキストをはさんで、子どもと差し向かいに座る。師匠がテキストの漢字を木製の棒で指し示しながら、声を出して読んでいく。それを子どもがおうむ返しに復唱する。子どもは師匠の指導がなくても読めるようになるまで、繰り返し音読する。素読では、子どもは師匠の読みを正確に模倣することに始まり、それを繰り返して完全に暗誦できるようになるまで習熟した。このように「聖人の教え」すなわち真理を蔵した「書かれた聖典」を日々、声に出して暗誦して、それをまさに「語られる聖典」として自分のものにしていった。こういう学びの方法は、たとえば、筆者が研究調査したことのあるインドのシャンカラ派僧院において、ブラフマチャーリン(学生)たちがヴェーダ聖典およびウパニシャッド聖典を習得するために、日々、実践している学習法と同じパターンを示している。このことは宗教学的に注目すべき事実であろう。

### 読書による儒学テキストの「身体化」

子どもたちは儒学テキストの文字を見て、心を集中して繰り返し口に唱える。そのことによって、そのテキストを自然に覚えていく。心や眼や口などの身体の器官を動員して「読書」をする。ここで言う「読書」とは、私たちがふつうイメージする読書とはちがって、素読による読書である。私たちはふだん読書をするとき、眼だけで黙読しているが、江戸時代における「読書」とは、眼だけで読む黙読とちがって音読であった。

素読による読書の意義について、江戸の教育に詳しい教育史学者の辻本雅史は、次のように言う。素読とは経書を「まるごとみずからのからだの内部に獲得し、〈身体化〉する過程」であり、いわゆる「からだで覚える」ことに相当する。テキストを暗誦する素読によって、その言葉の意味や解釈を与えなくとも、「義理に通じ」すなわち聖人の教える意味が理解できて、漢籍を自在に読みこなすことができるようになる。それは「音の響きや抑揚、リズムをともなって反復復誦することによって、いわばからだ全体が動員してなされる読書」である。<sup>(5)</sup>

素読によって〈身体化〉された儒学の知は、日々の生活の中で、実感的にその意味が理解できるようになる。その意味理解が日々の生き方の中で具体化されていく。儒学テキストの言葉だけの理解は、いまだ表層的な理解にすぎないが、経書の暗誦によって得た知識は心の深みへと次第に滲み込んでいく。こうしたプロセスを経て、「書かれた聖典」は素読による読書をとおして心に記憶され、次第に「語られる聖典」となっていくのである。

[註]

(1) 辻本雅史『「学び」の復権—模倣と習熟—』角川書店、1999年、18～21頁。

(2) 同上書、24～25頁。

(3) 貝原益軒(松田道雄訳)『和俗童子訓』(『貝原益軒』日本の名著14、中央公論社、1969年)、218～219頁。辻本雅史『「学び」の復権』、62頁。

(4) 辻本雅史編『教育の社会史』放送大学教育振興会、2008年、77頁。

(5) 辻本雅史『「学び」の復権』、70～73頁。